

社会実験による活性化拠点施設の継続的 運営・活動に関する考察 -大分県津久見市観光周遊性創出事業を事例として-

近藤 美沙希¹・石橋 知也²・柴田 久³

¹学生会員 福岡大学大学院工学研究科建設工学専攻 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1)

E-mail:td164006@fukuoka-u.ac.jp

²正会員 福岡大学助教 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1)

E-mail:tomoya@fukuoka-u.ac.jp

³正会員 福岡大学教授 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1)

E-mail:hisashi@fukuoka-u.ac.jp

大分県津久見市では、平成27年度からの津久見観光周遊性創出事業において3ヶ年計画で社会実験が実施されている。本研究では本事業を事例とし、2年目までの上記社会実験プロセスを詳述するとともに、関係者を対象に実施したヒアリング調査結果を踏まえ、社会実験による活性化拠点施設の継続的運営・活動について考察した。その結果、1)まちづくり活動によって醸成された機運が社会実験によって後押しされ、活性化拠点として結実したこと(場の創出)、2)ヒアリング調査結果から行政とまちづくり組織との見解の相違が明らかとなり、この相違をどのように共有、補完するかが課題であること、3)場の創出がもたらした拠点施設の所有や管理等といった課題が浮き彫りとなり、3年目に早急に検討すべき論点が明確化されたこと、が把握された。

Key Words : *Vitalization in Local City Centers, Pilot Program, Vitalization Base, Tsukumi City*

1. はじめに

近年、わが国の総人口は減少傾向にあり、超高齢化社会を迎えている。こうした人口減少と少子高齢化について内閣府は経済成長に対してマイナスの影響を与えているとしている。さらにこのような問題は、地方都市での空き家、空き店舗の増加等にも起因し、中心市街地の衰退が懸念されている。この対策として地域活性化に向けた社会実験の取り組みが全国的に実施されており、佐賀県佐賀市ではコンテナを活用したまちなかの賑わい創出やまちなか再生を目指した取り組みが行われている¹⁾。そうしたなか大分県津久見市では、平成27年度より定住促進のための市街地の魅力向上や今後の観光施策及び中心市街地活性化策につなげる市民参画の推進を目標とした「津久見観光周遊性創出事業(以下:本事業)」が進められており、3ヶ年計画で社会実験が実施されている。本研究では本事業を事例とし、2年目までの社会実験プロセスを詳述するとともに、関係者を対象に実施したヒア

リング調査結果を踏まえ、社会実験による成果と活性化拠点施設の継続的運営・活動について考察することを目的としている。

2. 津久見観光周遊性創出事業の概要

(1) 津久見市の位置的・歴史的概要

津久見市は大分県南東部に位置し、総面積は79.48km²(平成28年10月現在)で、人口は18,341人(平成29年3月現在)の地方都市である。東側は豊後水道に面しており、津久見湾の湾口部を囲うようにしてリアス式海岸が形成されている。また長目半島の延長上には地無垢島、沖無垢島が、四浦半島の延長上には保戸島が浮かび、合計3つの島が存在する。市域は背後にそびえ立つ鎮南山(536m)、姫岳(620m)、碁盤ヶ岳(716m)、彦岳(639m)といった山々により三方から囲まれている。津久見市はこれらの地形条件によって台風や季節風から守られており、

九州の中でも比較的温暖な気候に恵まれ、自然災害の少ない都市となっている(図-1)。

江戸時代から明治時代に掛けて、山傾斜を利用したみかん栽培や豊富な石灰岩による石灰づくりが進展し、大正5年の日豊本線臼杵・佐伯間開通によりみかん栽培やセメント産業は発展を遂げてきた。津久見IC近くにある石灰石の採石場は津久見市の工業を長年支えてきた様子を今なお伺わせている。さらに無垢島、保戸島は日本有数のマグロ漁獲量を誇っている。

(2) 津久見市中心市街地の概要

津久見市中心市街地はJR津久見駅を中心に広がっており、代表的な場所としてつくみん公園や商店街等が存在している(図-2)。つくみん公園には複合的大型遊具や「つくみ港まつり納涼花火大会」等のイベントを目的として多くの人々が来場している一方、商店街は過疎化等により衰退している。津久見市の主要な幹線道路である国道217号線は、商店街とつくみん公園の間に位置し、市民と観光客の両者にとって欠かせない存在として、日常的に利用されている。さらに平成14年の津久見IC開通や平成27年の東九州自動車道大分県内区間全線開通などを契機に、津久見市へのさらなる集客が期待されている。

(3) 津久見市中心市街地(商店街)の変遷

昭和35年頃津久見市の人口は37,164人を数え主要産業である石灰石・セメント産業に従事する多くの従業員で商店街は賑わっていた。昭和40年代に突入すると市中心部にはスーパー・パチンコ店・ボウリング場・映画館などが立地し、飲食店や商店街と連携し最盛期の賑わいを創出していた。しかし、徐々に国内のセメント消費が減少に転じ、全国的な高度経済成長期であったこともあり若年労働者の市外流出が始まっていった。昭和52年には国道217号線臼津バイパス(臼津トンネル)が開通し、臼杵市への移動時間が大幅に短縮されたが、人口や消費の市外流出に拍車がかかる大きな要因となった。平成初期にはバブル景気に支えられていたが核店舗であった「寿屋



図-1 津久見市の位置図

津久見店」が撤退したことにより、中心市街地の空洞化が本格的に始まっていった。平成14年に「津久見市中心市街地活性化基本計画」が策定され、行政、TMO、民間それぞれが主体となり推進していくとしていたが、効果的な実施には至らず計画策定から10年以上が過ぎている。現在の市中心部での消費傾向は食料品などの日用品が主であり、市民の動線は国道217号沿線に集中していると考えられる。今後さらなる高齢化を迎え商圈が縮小するとともに、古くから営業している老舗店舗の後継者不足の問題もあり、10年後には殆どの店舗が閉鎖に追い込まれる可能性が高い状況となっている²⁾(写真-1, 2)。

(4) つくみん公園の概要

つくみん公園は平成16年にオープンした市内で最大規模の公園である。この公園は津久見IC近くの場所に位置しており、また約80台の駐車場を完備しているため、市外からのアクセスや公園利用に優れている。夏期になると津久見市で最も大きな祭りである「つくみ港まつり」が開催され、特に「納涼花火大会」ではつくみん公園が多くの人で溢れている。休日、祝日ではつくみん公園に広がる芝生広場や複合的大型遊具を目的とした子供連れの利用者が多く、親子で来場する人が利用者全体の約8割を占めている。平日に関しても子供連れや、園児の遠足に利用される等、つくみん公園は人を集客する場として力を発揮している(写真-3, 4)。



図-2 津久見市中心市街地図



写真-1 商店街の様子

写真-2 シャッター街の様子



写真-3 遊具に集まる来場者

写真-4 つくみん公園の様子

(5) 津久見市における地域づくりの諸活動

津久見市では、行政及び地域住民によってこれまで様々なまちづくりの活動が行われてきた。平成20年7月3日には津久見港及びつくみん公園周辺が「九州みなとオアシス」として九州で6番目に認定され、大分県では大分港・別府港について3番目であった³⁾。加えて平成21年7月より津久見市都市計画マスタープランが作成開始され、原案作成時には地域ワークショップの開催やパブリックコメントを実施するなど市民の意見を反映する等の施策を行ってきた⁴⁾。さらに「C-Lab.TSUKUMI」等の市民団体が存在し、まちなか清掃ウォークの企画やつくみん公園及び市街地の空き店舗を利用した定期的なイベントを行ってきた実績があり、またそれらの活動を継続的に支える行政職員の存在があった。

(6) 津久見観光周遊性創出事業の背景

津久見市は観光振興として「つくみんカ島」や「つくみん公園」等が核となり、市外・県外から多くの観光客を集客している。しかし、マグロ漁、みかん栽培などの地域産業の低迷や、市外への人口流出による急激な人口減少などにより、津久見市中心市街地には空き家、空き店舗が多く発生している。さらにこれらの問題による市中心市街地の過疎化対策も津久見市の大きな課題となっている⁵⁾。そのようななか平成27年に津久見市は大分県の補助によって本事業を立ち上げ、3年間の社会実験を実施し津久見市の市中心市街地活性化に向けて検討することとした。

(7) 関係主体の体制・役割

本事業は協議、現地踏査及びワークショップ(以下:WS)を津久見市役所都市建設課及び商工観光課(以下:市役所)、津久見商工会議所(以下:商工会議所)、津久見観光協会(以下:観光協会)、が集結した津久見市周遊活性化対策協議会(以下:協議会)と大分県中部振興局及び大分県臼杵土木事務所(以下:大分県)で運営している。また福岡大学景観まちづくり研究室及び大分大学建築・都市計画研究室(以下:大学)が本事業のアドバイザーとして参画し、協議会と共同で市中心市街地の賑わい創出を目指した取り組みや組織づくり等を支援している。それぞれの役割として、市役所は事業に関わる情報、資料提供及び日程調整、大分県はWSの実施主体としての準備及び協議会に対する補助金の交付、商工会議所及び協議会は市役所、大分県と共に社会実験の実施に伴う対策、検討を行うものとしている。また大学はアドバイザーとして、WSの実施にあたり社会実験や運営組織の具体的な提案や協議ならびにWSにおける成果物の作成などを行っている。

本事業のWSは大分県が実施主体であるがWSプログラ

ムは市役所及び大学で作成し、WS前には事前協議として関係者間でプログラム内容の把握と共有を図っている。またWSメンバーは上記事業関係者に加え、津久見市街地商店主等の地域住民を交えており、WSは5人~7人を一班とする4班~6班に分け、各班のグループファシリテーターを大学から一人ずつ配置している。関係主体図は図-3に示す通りである。

3. 平成 27 年度の WS・社会実験プロセス

本事業の平成27年度における社会実験プロセスを表-1に示す。なお本章では、本事業1年目の社会実験実施に至るまでの検討内容やWS等について時系列的に詳述する。

(1) 本事業の内容把握及び検討

平成 27 年 3 月 24 日に大分県、市役所及び大学で本事業初となる協議を行った。まず市役所から本事業の概略説明、総合計画等の各種計画や市の展望についての説明がなされた後、津久見市内の空き地、空き家の増加、既存商店の減少など、津久見市が抱える課題についても共有が図られた。また県からは3ヶ年計画で実施される本事業の今後の方向性やWSスケジュールの確認がなされた。そこで次回WSでは大学からまちの活性化にむけたポイントについて説明した後、WS参加者から津久見のまちづくりの目標やアイデアを抽出することとした。また次回のWS参加者については、津久見のまちづくりについて積極的に発言・実行の意欲がある地域住民ならびに津久見市街地商店主(以下:コアメンバー)のみで構成するとし、協議会が参加者の選定を行った。その後、津久見市の課題である空き地、空き家及び既存商店の確認を目的とした現地踏査を行った結果、駐車場などの商店としての機能を持たない場所が商店街の大部分を占めていることが把握された(写真-5, 6)。

(2) まちづくりの目標の共有及び現状と課題の把握

平成 27 年 4 月 30 日に「津久見市のまちづくりのこれからを考える」と称した第 0 回 WS を行った(写真-7)。第 1 回 WS を開催する前段階として、本 WS ではコアメンバーに参加者を絞り、津久見市の賑わい創出のための具体的なアイデア等、幅広い意見を求めた。まず大学が市街地活性化に向けたポイントとなるであろう、賑わい、波及、継続の3点の重要性を提起し、参加者に対してそれらを考慮した提案や意見を求めた。グループ作業では参加者に対して津久見市の現状の課題や良い点、市街地活性化のアイデアなどを抽出した。その結果、「つくみん公園に日常的に集まる人を市中心市街地へ流したい」

「何かをチャレンジしたい人に商店街の空き地、空き店舗を使えるようにする」等の津久見市全体の賑わいの波及に繋がる内容の意見が多く挙げられた(図-4)。

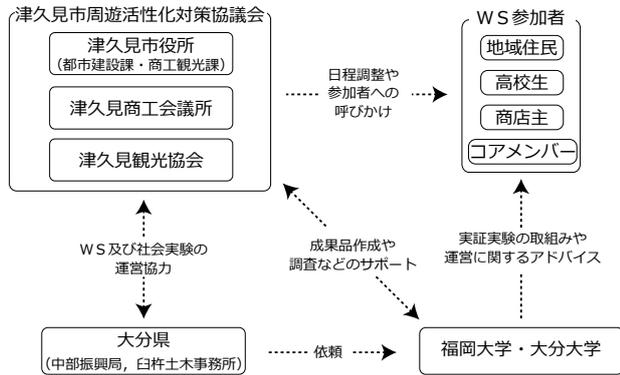


図-3 関係主体図



写真-5 関係者顔合わせ及び協議の様子



写真-6 現地踏査の様子



写真-7 第0回WSの様子

(3) つくみん公園の利用実態及びニーズの把握

平成 27 年 6 月 1 日(月)~6 月 2 日(火)に大分大学が、平成 27 年 6 月 6 日(土)~6 月 7 日(日)に福岡大学と市役所が、つくみん公園の利用実態やニーズを把握することを目的とし、平日と休日の各 2 日間にわたりヒアリング調査を実施した。調査時間は利用者の来場が多く見込まれる 9 時~18 時に設定した。質問項目は、つくみん公園の利用頻度、時間帯、目的、津久見市街地に求めるものなど 10 項目とした。その結果、平日で 44 部、休日で 172 部、計 216 部の回答を得た。これより、平日は高齢者単独の利用が多く、休日は 30 代の子供連れの利用が多い等、公園利用者の特徴が顕著に表れた。また津久見市街地に対する要望を聴取したところ、「飲食店が欲しい」「つくみん公園に木陰がほしい」などの具体的な意見が得られ、つくみん公園の更なる賑わい創出を検討する基礎資料となった。さらに本調査に加えて第 0 回 WS において、「商店街になにかがあるのかわからない」「まちなかの情報が伝わって来ない」という意見が多く挙げたことを受け、商店街の実態を把握するための実地調査も併せて行った。その結果、つくみん公園に多くの人が集まっている一方で市街地側での人の回遊の少なさが把握された。また商店街を構成する店舗が営業しているかどうか区別のつかない状況も多く確認された。

(4) 第 1 回 WS に向けた協議

平成 27 年 6 月 11 日に大分県、市役所、観光協会及び大学で第 1 回 WS に向けた協議を行った(写真-8)。ここでは大学より第 0 回 WS の振り返りが行われた後、社会実験の具体的な取り組みの参考資料として仮設施設(コンテナ、テント、パラソル、キッチンカー)を活用したまちなか再生の先行事例の説明がなされた。また参加者間で 3 ヶ年を通じた市街地活性化の目標を検討し、1 年目には「つくみん公園の賑わい強化」、2 年目には「まちなかでの暮らしのたまり場の創出」、3 年目には「管理主体の検討」という目標案を作成した(図-5)。こうした協議の末、第 1 回 WS では 3 年間の目標案の確認と社会実験の具体的な取り組み内容について検討する方針とした。

(5) 社会実験の取り組みの検討

平成 27 年 7 月 6 日に開催された第 1 回 WS では、コアメンバーに加えその他地域住民、地元の高校生及び大学生を交えた構成で議論を行った(写真-9)。まず大学より第 0 回 WS の振り返りと事前協議で提示した仮設施設によるまちなか再生の事例紹介が行われた。また 3 年間の目標案についても参加者間で確認、共有した。その結果、「暑さ・寒さをしのげる」等の理由から社会実験の内容は、コンテナと移動可能

表-1 平成 27 年度プロセス表

| 日付・項目 | 協議・作業内容 | 成果(意見)・決定事項 |
|-------------------------------------|--|--|
| 3/24 協議① 現地踏査 | ・関係者間顔合わせ(津久見市、大分県、福岡大学、大分大学) ・全体計画の流れを共有 ・津久見市中心部まちあるき調査 | ・市街地活性化のための拠点作り求められるポイントとなる日常性、波及性、継続性を意識した施策を行う ・WSは第0回から第6回までを予定 ・実証実験は夏期と冬期2回を予定 ・津久見市役所が選定したコメンターに協力を要請 |
| 4/30 第0回WS | ・関係者と津久見市の商店主(コメンター)で地域の課題やまちづくり活性化のアイデアを抽出 | ・「つくみん公園を賑わいの拠点として位置づけていく」「つくみん公園に日常的に集まる人を市街地へ流したい」「中心市街地内の空き地を活用して人々が交流できる場を作る」等、津久見市全体の賑わいの波及に繋がる意見が多く挙げられた |
| 6/1~2 6/6~7 つくみん公園 ヒアリング調査 | ・つくみん公園の利用実態やニーズの把握を目的としたヒアリング調査を実施 ・つくみん公園の利用頻度や時間帯、目的、津久見市街地に求める物等10項目を調査 ・商店街の実態を把握するための実地調査 | ・平日で44部、休日で172部、計216部の回答を抽出 ・実地調査では、つくみん公園に人が多く集まっている一方で市街地側では人の回遊が少ない実態を把握 |
| 6/11 協議② | ・第0回WSまとめ及びつくみん公園ヒアリング調査結果を報告 ・第1回WSでの検討内容を協議 ・福岡大学から実証実験の参考として仮設施設(コンテナ、テント、パラソル、キッチンカー)を使用した先行事例の紹介 ・3年間の目標案の検討 | ・事業の3年間の目標案を作成 ・1年目:つくみん公園の賑わい強化 2年目:くらしのたまり場の創出(まちなか) 3年目:管理主体の検討 ・第1回WSでは3年間の目標案の確認、共有ならびに社会実験で使用する仮設施設や取り組みの内容について検討し、運営者、運営方法については協力者を募ることとした。 |
| 7/6 第1回WS | ・第0回WSメンバーに加え地元高校生及び大学生9名が参加 ・事業の3年間の目標案を確認、共有 ・社会実験の内容について検討 | ・3年間の目標に関しては概ね了承を得た ・社会実験の内容はコンテナと移動可能なパラソルを設置する取り組みに決定 |
| 8/27 協議③ | ・関係者に加え、コメンターより3名が協議に参加 ・つくみん公園に出向き、コンテナの大きさや設置予定箇所の確認 ・第2回WSでの検討内容を協議 | ・コンテナ内での取り組みとしてカフェ&ショップと雑誌コーナーならびに観光情報施設の併設案を提案 ・運営者については店舗経営者や団体等に協力を仰ぐ必要があるため第2回WSで協力者を募る ・コンテナの名称を募る |
| 9/2 第2回WS | ・つくみん公園に出向き、コンテナの大きさや設置予定箇所を確認 ・コンテナの設置予定箇所及び取り組み等の提案、アイデアの聴取 | ・コンテナは築山上に設置することで概ね了承を得た ・コンテナ内の取り組みはカフェ&ショップと雑誌コーナーならびに観光情報施設の併設案で運営することに決定 ・運営者、運営方法については個人名や団体名などの具体的な意見を促した |
| 10/6 事業 打ち合わせ① | ・WS参加者と県、市職員計25名が参加 ・これまでのWSの振り返り及び事業の3年間の目標を共有、津久見ふるさと振興祭での取り組み内容、今後の運営について協議 | ・「コンテナ使用の内規が必要ではないか」「まちづくり会社設立に向けた準備を進めるべき」などの意見が出された ・「今後、自分が関わること」を持ち寄り、ふるさと振興祭での取り組みも含め次回事業打ち合わせ会で再度協議 ・コンテナの色は白、ウッドデッキは濃い茶系と決定 |
| 10/20 事業 打ち合わせ② | ・WS参加者と県、市職員計20名が参加 ・事務局から「コンテナ活用の内規(案)」について説明 ・地域住民たちがこれらから聞かれることや、津久見ふるさと振興祭での取組について協議 | ・コンテナ内での取り組みは休憩所と観光情報発信を主に試行し、徐々に内容を充実させていく方針とした ・コンテナ管理の当番を決め、当番は土日祝のみオープンさせ来訪者のニーズを察する ・ふるさと振興祭に合わせてコンテナをオープンし、コンテナの名称及びコンテナ内での取り組みのアイデアを来場者に対しアンケート形式で聴取 |
| 10/24・25 社会実験開始 | ・雑誌コーナー及び観光情報を提供する場としてコンテナを開放 ・津久見ふるさと振興祭でのオープニングセレモニーで市長、福岡大学(柴田氏、石橋氏)、大分大学(堀野氏)、建設業協会青年部会長・副会長、津久見高校商業クラブの7名でテークアウト ・コンテナの名称及びコンテナ内での取組についてのアンケート調査の実施 | ・10月24日に84部、25日に160部、計244部の回答を抽出 ・コンテナの名称については「つくみんの丘」「つくみんの家」などが多くの支持を得た ・コンテナ内での取り組みのアイデアとしては軽食等のサービスや既存イベントでの有効活用を求める意見が多く挙げられた |
| 11/10 事業 打ち合わせ③ | ・WS参加者と県、市職員計20名が参加 ・前回の打ち合わせ、津久見ふるさと振興祭アンケート結果、コンテナ管理者記録などの報告 ・コンテナの名称及びWSの開催、コンテナの今後の運営について協議 | ・コンテナの名称はアンケート結果を踏まえ①つくみんの丘、②つくみんコンテナ、③つくみん館、④つくみんの家、⑤コンテナ293(ツクミ)号の5案に絞り、次回WSまでに投票等で決定 ・「営利活動はどこまでが許容範囲なのか」「ただ開けておくだけではもったいないので、イベントをやりたいなどコンテナの運営や活用方法などについての疑問や意見が多く挙がった ・年内の土・日・祝日の当番当番の決定 |
| 11/21~24 コンテナ設置後 ヒアリング調査 | ・コンテナ設置後のつくみん公園来場者の利用実態ならびに意識等の把握を目的としたヒアリング調査を実施 ・コンテナ設置前後の賑わいの変化やコンテナの満足度、津久見市の情報発信の評価等13項目を調査 | ・平日で20部、休日で131部、計151部の回答を抽出 ・コンテナ内の観光情報から市街地に興味・関心を示す人は多いが、実際に足を運ぶとなると躊躇する人の姿が見受けられた |
| 11/25 協議④ | ・本事業の今年度、来年度以降の取り組み、コンテナ活用の内規(案)、第3回WSの取り組み内容について協議 | ・第3回WSではコンテナの名称アンケートの実施ならびに内規案の共有及び内規に対する疑問点、改善点、アイデア等を抽出する |
| 12/4 第3回WS | ・コンテナの名称アンケートの実施 ・コンテナ活用に関する内規案のイメージ図を活用し、内規案の共有及び具体的なアイデアや改善案の聴取 | ・コンテナの名称は「コンテナ293(ツクミ)号」に決定・公表 ・運営組織の設立が参加者の共通の認識であることを把握 ・内規案について「利用申請は随時受付がよい」「内規で使われている言い回しが硬い」等の改善意見が多く挙がった |

第0回WS全体成果品

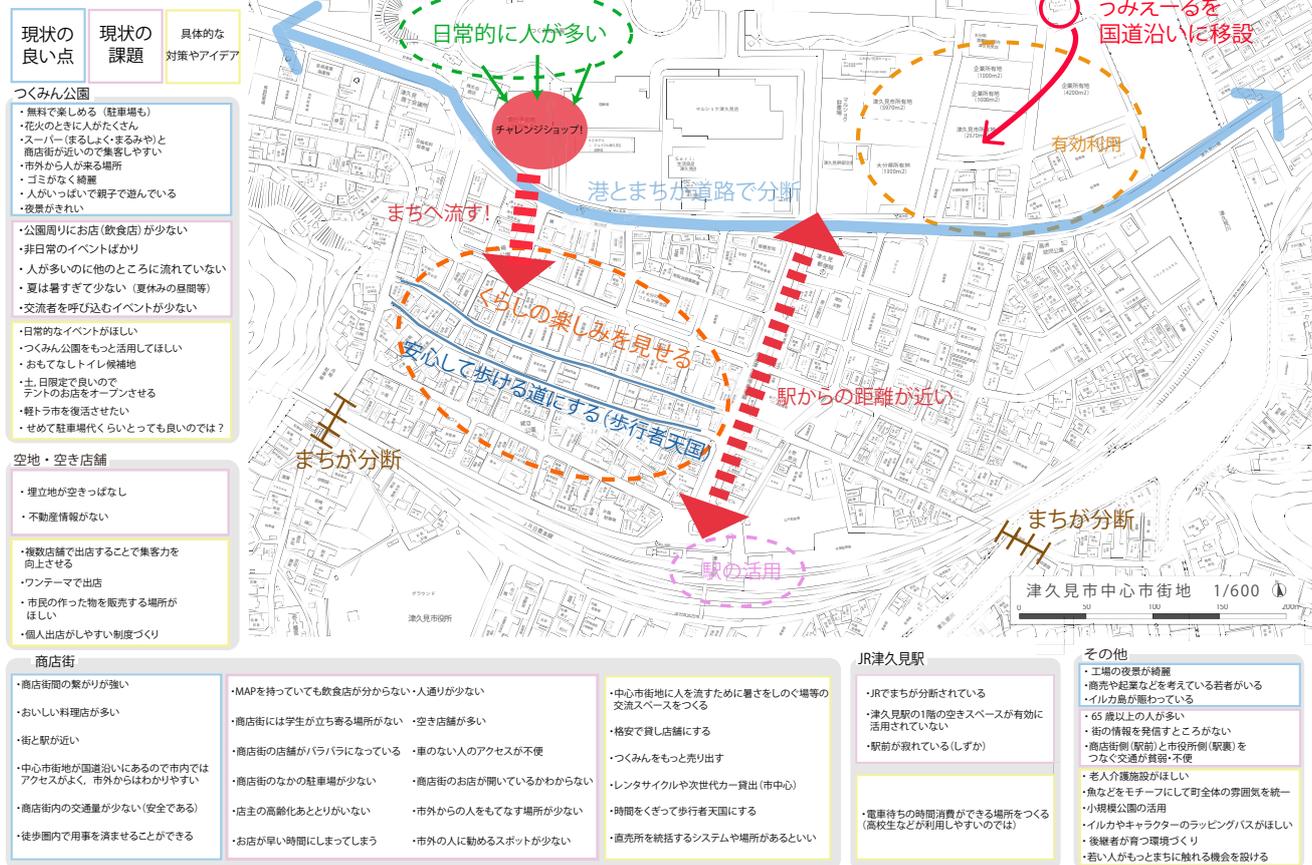


図-4 第0回 WS全体成果品

なパラソルを設置する取り組みとした。また 3 年間の目標に関しては概ね了承を得た一方で、「2 年目の目標に早くとりかかってほしい」など、まちなか対策の早期実現を訴える意見も挙げられた(図-6)。

(6) 第 2 回 WS に向けた協議

平成 27 年 8 月 27 日に第 1 回 WS の結果を踏まえ大分県、市役所、大学及びコアメンバー3 名で第 2 回 WS の取り組み内容について協議を行った。一般市民より無償で提供を受けたコンテナの確認を行うため、まず本協議はつくみん公園にて開催された(写真-10)。本協議の参加者間でコンテナの大きさや劣化状況等の確認が行われた結果、コンテナを整備した上で社会実験に活用することで合意が図られた。コンテナの確認が行われた後、大学から設置箇所選定におけるポイントの説明がなされた。これよりコンテナの最適な設置箇所として 5 つの利点が考えられる築山上に設置することが参加者間で合意された(写真-11)(表-2)。続いて会議室に移動し、コンテナ内での取り組み内容や運営者、運営方法についても重点的に協議した。これより取り組み内容についてはカフェ&ショップと雑誌コーナーならびに観光情報施設を併設する案で合意され、第 2 回 WS でこれらの案を提案することとなった。さらに運営者、運営方法については第 2 回 WS で店舗経営者や団体等に、協力者を募る方針とした。

(7) 社会実験開始に向けた作戦会議

平成 27 年 9 月 2 日に社会実験開始に向けたコンテナの設置箇所や使い方を検討する第 2 回 WS が開催された。本 WS の直前にコンテナの確認・共有を図るため任意参加でつくみん公園にて視察が行われており、コアメンバーとその他地域住民、地元の高校生及び大学生を交え議論が行われた。そこでは大学より事前協議で検討したコンテナの設置箇所の説明が行われ、提案通り築山上に設置することで WS 参加者から概ね了承が得られた。コンテナの確認を行った後、会議室でグループ作業に取りかかり、WS 参加者に対してコンテナ内の取り組みについてアイデアを聴取した。これより、カフェ&ショップと雑誌コーナーならびに観光情報施設の併設案で運営する方針とした。特に「ファッション誌やマンガ、絵本があると良い」等、雑誌コーナーの運営に関する意見を多く抽出できた。また運営者、運営方法については個人名や団体名などの具体的な意見が挙がるよう求めた。その結果、「本は創造工房さんや市民に募る」等、実現性の高いアイデアが多く得られた。さらにコンテナの名称についても議論し、「つくみん缶」「コネクトコンテナ」などの意見が挙げられた(図-7)。これまで実施してきた WS ならびに後述する事業打ち合わせ会のなかで、社会



写真-8 第 1 回 WS に向けた協議の様子



写真-9 第 1 回 WS のグループ作業の様子



写真-10 コンテナの大きさ等を確認する様子



写真-11 コンテナの設置箇所を検討する様子

表-2 築山に設置することの利点

| |
|---------------------------------------|
| 1. つくみん公園全体を眺めることが可能でまち側からの視認性も良い |
| 2. 遊具の見晴らしが十分に確保できる可能性がある |
| 3. 水道、電気の引き込みがしやすい |
| 4. 公園内でのイベントの際に邪魔にならない場所である |
| 5. コンテナを公園緑地の端に設置することで将来的な用途変更に対応しやすい |

津久見観光周遊性創出事業の3年間の目標(案)

1年目 つくみん公園の賑わい強化

- ・仮施設(プレハブ、テント、パラソル、コンテナ)などを活用した場づくり
- ・周囲からの眺望を阻害している築山や木々を改善した拠点づくり

2年目 暮らしのたまり場の創出(まちなか)

- ・若者(高校生)等が気軽に集う場所やまちなかで交流できるような場所づくり
- ・空き家活用の本格的な整備

3年目 管理主体の検討

- ・つくみん公園内にできる新たな拠点やまちなかにできるたまり場を継続的に運営・管理する組織づくり



図-5 本事業の3年間の目標(案)

第1回WS全体成果品

良いところ

- 3年間の目標について
- ・案の組み立てはよい → 流れが自然でよい
- ・目標のイメージはついた
- ・拠点としての「つくみん公園」はOK
- ・つくみん公園から始めるのは大賛成
- ・1年目がうまくいくと2年目にいきやすい
- ・公園とまちなかの「動線」を考慮すべき
- ・1年目と2年目が独立しているのでは
- ・2年目の目標に早く取り掛かってほしい
- ・1, 2年目を平行で考えてほしい
- ・1年目の案を2年目以降も続けてほしい
- ・1年目に力を入れる
- ・イルカ島などへの飛遊は?

つくみん公園

- ・人がいる → 何かを始めやすい
- ・遊具が大きい → ロケーションがよい
- ・大分市にはない規模の公園 → 環境がよい
- ・公園の端から端が遠い
- ・高校生は来ない → コンセプトがない
- ・大人だけでは来づらい
- ・木が邪魔 → 風が気になる
- ・つくみん公園が見えない(外部から)
- ・つくみん公園でみかんの販売は難しい
- ・子供から目を離せない
- ・小さい子を連れて店内に入りづらい
- ・食べ物の情報がない
- ・全部タダでは、事業性がない
- ・夏は熱くて滑り台が使えない
- ・公園を示すサインが少ない

まちなか

- ・水遊び場を作る(2)
- ・サインを増やす(公園誘導のための)
- ・BBQができる場所 → イベントを毎週する
- ・つくみん公園とつくみん公園のコラボ
- ・カフェ(長く時間が過せる場所)
- ・利用者からお金を取る
- ・移動販売車をいれる → 呼ぶ
- ・西大分のかんたん港開いたいところ
- ・日常的なイベント(宝探し)
- ・健康用設備のある場所を増やす
- ・賑わいと安らぎの場
- ・子供も大人も楽しめる場所
- ・行く度に変化を感じられる(季節など)
- ・国道211号線から賑わいを見せる(2)

つくみん公園「賑わい強化」

複合コンテナ(コンテナ、移動可パラソル)正
コンテナ+パラソル「賑わいの見える化」

- ・収益モデル
- ・情報発信
- ・つくみくら(高校生ショップ)
- ・収納スペース → 大人も楽しめる

築山どうする!?

**つくみん公園とまちをつなぐ
(タイミングと方法を考える)**

**まちのたまり場
暮らしのたまり場づくり**

駅の近くT たまり場の見える化T

- ・高校生のたまり場(充電、読書、勉強)
- ・小腹を満たす場(持ち込み可)
- ・情報発信の場

3年間の目標について

- 1年目 つくみん公園の賑わい強化
- 2年目 暮らしのたまり場の創出(まちなか)
- 3年目 管理主体の検討

・概ね3年間の目標はOK

実践実験

- ・KADANという店は入りやすい
- ・高校生の遊ぶところがない
- ・高校生は店に入りづらい
- ・商店街を活性化するのは大変
- ・美味しいのお店が汚い
- ・まちなかの動きが伝わってこない
- ・家族連れをターゲットに
- ・まちなか図書館がほしい
- ・テイクアウトできる店
- ・無料で使えるスペースがよい
- ・充電や宿題ができること
- ・つくみぬの友達が集まっているなどのきっかけがあれば
- ・カフェ(利用者、運営者)(3)
- ・たまり場がほしい
- ・分りやすい目印(宣伝効果)
- ・チャレンジショップ
- ・駐車場を移動販売に活用

駅周辺

- ・駅が交流の場(2)
- ・電車の本数が少ない
- ・観光協会に入りづらい
- ・高校生が多い
- ・電車を待つ時間は駅から出ない
- ・駅の下にお店がほしい
- ・電車を待つ場所がほしい
- ・飲み物がほしい
- ・駅から学校の間に何かほしい

その他

- ・ジョイフルは安くても、長い時間安らぐことができる
- ・電車の待ち時間が1時間以上あればジョイフルへ(高校生)
- ・高校生は市街地に行かない
- ・商店街が一方通行でわかりづらい
- ・インフォメーションの場所と方法
- ・情報発信の場・観光拠点となる場
- ・築山を取る(つくみん公園が通られる)
- ・築山を取らない(子供の遊び場だから)

図-6 第1回WS全体成果品

実験に対する協議が積み重ねられたことにより、コンテナの設置ならびに運営までが短期間で実施された。また設置されたコンテナは平成 27 年 10 月 24 日(土)～25 日(日)に開催される来場者数約 2 万人規模の津久見ふるさと振興祭に合わせて開放することを目標とした。

(8) 第 1 回事業打ち合わせ会

社会実験の実施前後に事業関係者が自主的に集まり、事業の近況報告や自由な意見交換を行う事業打ち合わせ会が計 3 回開催されている。平成 27 年 10 月 6 日には大分県、市役所及び WS 参加者の計 25 名で 1 回目の事業打ち合わせ会が開催された。ここでは、市役所が 3 年間の目標及び事業予算、コンテナ設置作業の進捗状況について説明し、続いてコンテナの名称や津久見ふるさと振興祭での取り組み、今後の運営などについて議論が行われた。これより津久見ふるさと振興祭では来場者に対して、コンテナの名称についてのアンケート調査を行い、その結果を踏まえ、次回の WS にてコンテナの名称を決定する事となった。また今後の運営について参加者からは「コンテナ利用の内規が必要ではないか」「次年度はまちづくり会社設立に向けて準備を進めるべき」等、初期段階で管理主体の検討を行う必要性が看取された。そこで運営方法について社会実験開始前に再度事業打ち合わせ会を行い、次回までに「個人的に協力できること、

関わること」を持ち寄ることとなった。

(9) 第 2 回事業打ち合わせ会

平成 27 年 10 月 20 日に大分県、市役所及び WS 参加者の計 20 名で 2 回目となる事業打ち合わせ会が開催された。前回の事業打ち合わせ会で「コンテナ活用の内規が必要」との意見が挙げられたため、本事業打ち合わせ会では市役所よりコンテナ活用の内規案が提案された。その際「受付時期と利用期間など細かな部分の決め事も必要では」「まちづくり組織的なものが中間に絡んでくれるとありがたい」等、多くの意見が挙げられたため、内規の完成には時間を要すると判断し、当面のコンテナの運営については情報発信の取り組みや休憩スペース、雑誌コーナーを充実させる方針とした。また個人的に協力できること、関わることについての具体案として「チャレンジショップの開催」「コンテナ管理の手伝い」等、参加者の積極的な協力を募ることができた。さらに当面のコンテナの運営については土・日・祝日のみ開錠し、来場者の需要を探ることとした。

(10) 社会実験の開始

平成 27 年 10 月 24 日より、つくみん公園の賑わい強化を図ることを目的に設置されたコンテナの社会実験を開始した(写真-12)。社会実験開始日を同公園で開催さ



図-7 第2回WS全体成果品

れる津久見ふるさと振興祭の実施日に合わせることで、まちづくりの拠点となるコンテナの存在を市民に対して盛大に周知する機会となった。なおコンテナのオープニングセレモニーでは、市長や福岡大学(柴田氏、石橋氏)、大分大学(姫野氏)、建設業協会青年部会長・副会長、津久見高校商業クラブの学生など7名でテープカットを行っている。コンテナ内は雑誌コーナー、観光情報を提供する場及び休憩スペースとして開放され、本を読む高齢者やウッドデッキに座る家族連れで賑わった(写真-13, 14)。コンテナの開錠時間は土・日・祝日の10時～17時とし、主に協議会やコアメンバーが当番制で管理している。さらにコンテナへの来場者に対し、コンテナの名称及びコンテナ内での取り組みについてのアンケート



写真-12 社会実験の開始



写真-13 コンテナ内の様子



写真-14 ウッドデッキの様子

調査が実施され、2日間で244部の回答が得られた。コンテナの名称については「つくみんの丘」「つくみんの家」等が多く支持を得ており、取り組みのアイデアとしては軽食の提供や既存イベントでの有効活用、授乳スペースなどの要望があった。またその他の意見として「津久見への帰省が楽しいものになるよう取り組んで欲しい」「思っていたよりも広く座れるスペースが良かった」など利用者からはコンテナに対する期待や賞賛の声が窺えた。

(11) 第3回事業打ち合わせ会

平成27年11月10日に大分県、市役所及びWS参加者の計20名で第3回事業打ち合わせ会が開催された。本事業打ち合わせ会では津久見ふるさと振興祭で募集したコンテナの名称アンケート結果の報告及びコンテナ管理者による管理報告が行われた後、コンテナの名称及び今後のコンテナ運営について協議された。その結果、コンテナの名称については、アンケート結果を受け「つくみんの丘」「つくみんコンテナ」「つくみん館」「つくみんの家」「コンテナ293(ツクミ)号」の5案に絞り、次回のWSでこれらの候補の中から投票で決定することとした。また今後のコンテナ運営については、「コンテナをただ開けておくだけではもったいない」「まちなか周遊につながる取り組みでなければ、この事業の発展や継続性が担保できないのでは」等、コンテナ運営の改善点や1年目の取り組みだけではなく、本事業の今後を見据えた意見も挙がった。

(12) 平成27年度つくみん公園ヒアリング実態調査

平成27年11月21日(土)～11月24日(火)に福岡大学が、社会実験開始(コンテナ設置)後のつくみん公園来場者の利用実態ならびに意識等を速報として把握することを目的にヒアリング実態調査を実施した。併せて、コンテナ内に設置された地図・パンフレット等の観光情報発信がもたらす効果についても把握を試みた。調査時間は10時～17時とし、質問項目は、コンテナ設置前後の賑わいの変化やコンテナの満足度、津久見市の情報発信の評価など13項目を設定した。その結果、平日で20部、休日で131部、計151部の回答を得た。「コンテナ設置後つくみん公園の賑わいが向上したと思いますか」という質問に対し、休日では37%の人が「思う」と回答した。しかし、平日及び休日共に「どちらでもない」という意見が最も多く、「コンテナ自体に人が集まっているのは見るが、つくみん公園の賑わいに影響を及ぼしたかはわからない」という意見を合わせると、利用者にとってつくみん公園の賑わいが強化されたという実感については、調査時では確認しにくい状況であった。つぎに「コンテナ内の観光情報を参考に市街地に出向こうと感

じますか」という質問に対しては、休日で「とても感じる」「やや感じる」の合計は 36%であり、「どちらでもない」と回答した人が過半数を超えていた。これよりコンテナ内の観光情報から市街地に興味を示す人は多いものの、「シャッターの降りている店ばかりで足が遠く」「子供連れでは入りづらい店が多い」などの意見も考慮すると、実際に市街地に足を運ぶことには躊躇しているとも捉えられる。

(13) 第 3 回 WS に向けた協議

平成27年11月25日に大分県、市役所及び福岡大学で第3回WSの方針について議論がなされた。第1回～3回までの事業打ち合わせ会において、コンテナ利用の内規づくりの必要性が地域住民から挙げられていた。これより、第3回WSではコンテナ活用に関する内規案を提案し、これに対する疑問点、改善点、アイデア等をWS参加者間で議論することとした。コンテナ活用に関する内規案は、市役所が作成し、WS参加者に説明しやすいよう福岡大学と共同でイメージ化した(図-8)。内規の内容については主に、コンテナを活用する事業者の利用手続きに関する流れについて詳述されており、協議会の役割やWSメンバーを主体とする運営組織の設立の提案とその役割についても記述されている。さらに第3回WSではコンテナの名称の決定も行うため、WS参加者にアンケートを実施し、WS内で公表することとなった。コンテナの名称の候補としては、「つくみんの丘」「つくみんコンテナ」「つくみん館」「つくみんの家」「コンテナ293(ツクミ)号」等が挙げられ、これらの中から最多得票を獲得したものに決定することとした。

(14) コンテナ活用に関する内規案についての検討

平成27年12月4日にコンテナの名称決定及びコンテナ活用に関する内規案・運営イメージの共有を目的とした第3回WSが開催された。本WSではまずこれまで行われてきたWSを振り返り、その後コンテナの名称決定のためのアンケート用紙を配布し記入・投票を行った。続いて大学からコンテナ活用に関する内規案・運営イメージの提案を行い、グループ作業に取りかかった。そこではコンテナを活用する事業者の利用手続きに関して「利用申請は随時受付がよい」「内規で使われている言い回しが硬い」「利用許可の判断基準が不透明」など、内規を使いやすくするための改善意見が多く挙げられた。またコンテナの活用を管理・持続するにあたり運営組織を設立することが、WS参加者の共通の認識として挙げられ、「活動的な組織が必要」「社会実験終了後のまちづくり会社化」など将来の運営組織の方向性についての具体的な言及もあった。今後WSでの協議を踏まえ、津久見市が内規案・運営イメージの改良を行い、運営組織につい

ても着手していくこととなった。またWSメンバーを中心に運営組織の基礎となる準備会の立ち上げも早急に行っていくことを確認した(図-9)。最後にコンテナの名称のアンケートを開票した結果、「コンテナ293(ツクミ)号」が最も多くの票を得たため、コンテナの名称はコンテナ293(ツクミ)号で決定することとした。

4. 平成28年度のWS・社会実験プロセス

本事業の平成 28 年度における社会実験プロセスを表-3 に示す。本章では、本事業の 2 年目の取り組みについて時系列的に詳述する。

(1) 平成 28 年度の活動方針協議

平成 28 年 5 月 20 日に大分県、市役所、福岡大学及びコアメンバー1名で昨年に引き続き運営組織の形態やコンテナの施設整備について協議を行った。また2年目の目標である「まちなかでの暮らしのたまり場の創出」に向け、まちなか拠点施設の候補が挙げられ、コアメンバーによる視察及びものづくりWSを行う方針とした。

(2) 宮本共有会館の視察・協議

平成28年7月21日に大分県、市役所、大学及びコアメンバーでまちなか拠点施設の候補に挙げられた宮本共有会館の視察を行った(写真-15)。宮本共有会館は、地元の共有組合が所有している2階建ての建物である。現在1階は共有組合の事務所、2階は英語教室や華道教室として使われているため、1階部分の間借りが一部のコアメンバーと共有組合との間で検討されていた。参加者より「話し声や騒音が迷惑にならないか」等の質問が挙げられたが、視察をしながら意見交換を行い、施設の改修や活用方法について共有組合側から理解を得られた。その後コンテナ293号に移動し、視察によって得られた情報を元に、宮本共有会館の活用方法の検討や運営組織立ち上げに向けた協議が行われた。運営組織については法人



写真-15 宮本共有会館視察の様子

運営組織と連携したコンテナ活用のイメージ

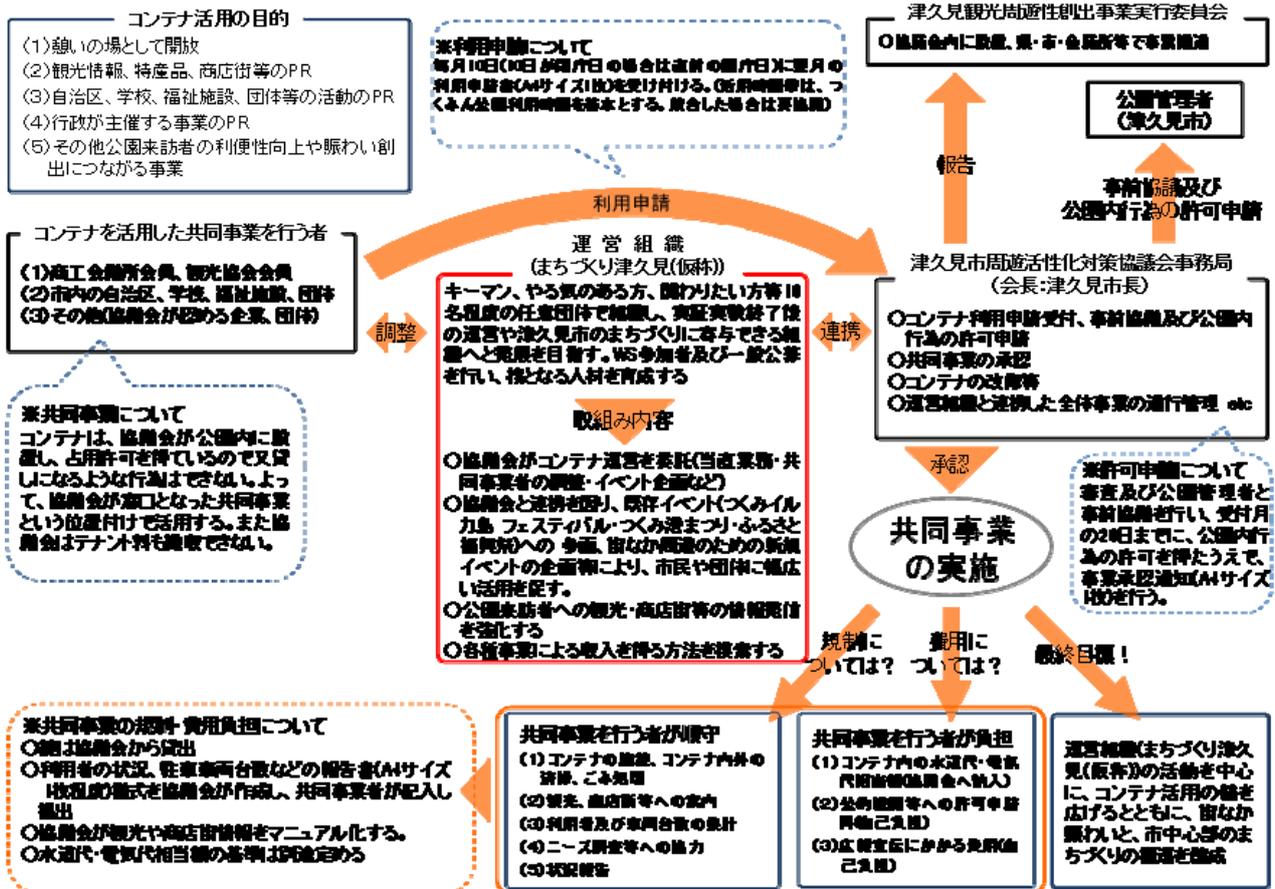


図-8 内規に基づいたコンテナ活用のイメージ

第3回 WS 全体成果品

津久見市周遊性創出事業実行委員会 コンテナ活用イメージ策定案に添削

大切なコト
「まち(全体)の賑わい・にぎわい」
「まちづくり組織、企業として」

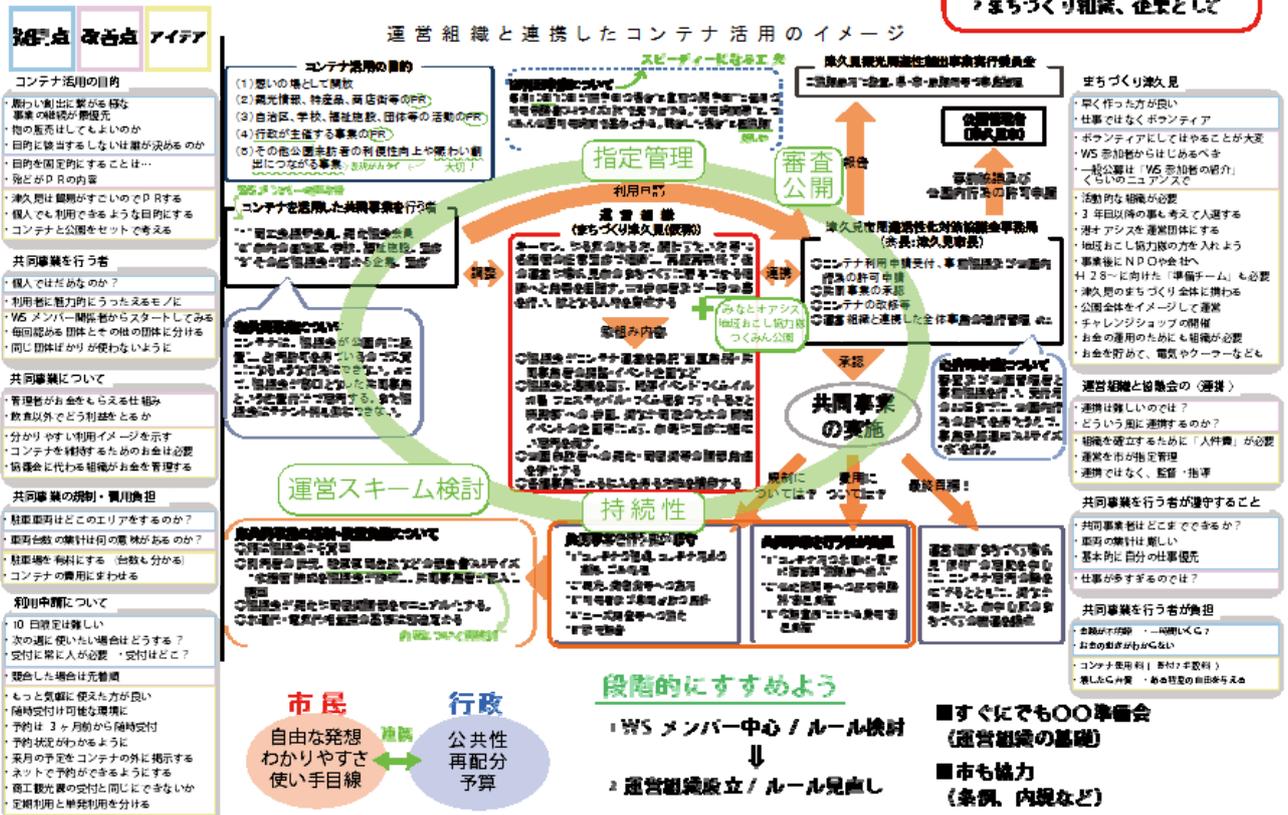


図-9 第3回 WS 全体成果品

表-3 平成 28 年度プロセス表

| 日付・項目 | 協議・作業内容 | 成果(意見)・決定事項 |
|-------------------------------|--|--|
| 5/20 協議① | ・参加者は大分県、津久見市、福岡大学、コアメンバー ・平成28年度の社会実験の方針の確認 ・2年目の目標「まちなかでの暮らしのたまり場の創出」の取り組みについて議論 | ・平成28年度の年間スケジュールの確認 ・まちなか拠点施設候補の選定 ・コアメンバーによる拠点施設の視察を行う方針とした |
| 7/21 宮本共有会館視察・協議② | 【宮本共有会館視察】 ・参加者は大分県、津久見市、大分大学、福岡大学、コアメンバー ・施設内の見学や活用方法の検討 【協議②】 ・参加者は大分県、津久見市、大分大学、福岡大学、コアメンバー ・コンテナ293号にて、運営組織の形式や活動内容について議論 | 【宮本共有会館視察】 ・屋上を活用した納涼イベントをやりたい、映画を上映してはどうか、施設の整備にお金がかかるのでは等の意見が挙げられた 【協議②】 ・運営組織は法人格を取らずに、任意団体とする ・イベントの時期や内容の検討 |
| 8/27 納涼イベント | ・コアメンバー主催の納涼イベントの開催 ・参加者は大分県、津久見市、大分大学、福岡大学、コアメンバー、地域住民、計81名 ・コンテナ293号の新たな活用方法が広く周知された | ・まちづくり組織が社会実験終了後に収益を得ながら自走していくための先駆的な取り組みとなった ・事前に参加人数を把握するのが困難であったことやイベント周知の方法などについては今後改善していく必要がある |
| 9/23 まちづくり学習会 | ・参加者は大分県、津久見市、大分大学、福岡大学、コアメンバー ・津久見市職員や商工会議所職員に事業の詳細の周知 ・コンテナ293号の運営や津久見市のまちづくり活動を行う任意団体「まちづくりツクミツクリタイ」の発足が提案された | ・本事業への理解が得られた良い機会となった ・これまで手がつけられていなかった津久見市の観光資源や本事業における社会実験終了後の懸念等、多くの意見が挙げられた |
| 10/6～10 つくみん公園 ヒアリング調査 | ・社会実験開始から1年が経過したことを受け、コンテナ設置後のつくみん公園来場者の利用実態ならびに意識等の把握を目的としたヒアリング調査を実施 ・コンテナ設置前後の賑わいの変化やコンテナの満足度、津久見市の情報発信の評価等20項目を調査 | ・平日で46部、休日で175部、計221部の回答を抽出 ・コンテナの存在は知っているもの入りづらい等、コンテナの運営に関する課題の把握 |
| 10/18 第4回WS | ・事業の3年間の目標を再確認 ・ツクミツクリタイの立ち上げと今後の取り組み等の提案 ・マネジメント部会、プレイヤー部会、サポーター部会の3つに分かれグループ作業を実施 | ・ツクミツクリタイの設立に向け会則を作成することが決定 ・つくみん公園で小物作りのWSがしたい、まちなか全体で楽器を使ったストリートライブの開催等、具体的な活動案が挙げられた |
| 10/22 コンテナ293号 ロゴマーク除幕式 | ・参加者は津久見市長や津久見商工会議所会頭、大分大学、福岡大学、コアメンバー ・コンテナ293号のロゴマーク設置開始 | ・コンテナ設置から1年という節目の時期に、多くの人が集まるイベントにてコンテナの新たな活動を周知できた良い機会となった |
| 11/8 協議③ | ・参加者は大分県、津久見市、福岡大学、コアメンバー ・ツクミツクリタイの会則や役員案、事業計画についての共有 ・第5回WSのグループワークの内容について協議 | ・ツクミツクリタイ設立総会ならびに従来のWSメンバーに加えて新たな参加者を交えたグループワークを行うこととした ・設立総会を持ってツクミツクリタイを始動させることに決定 |
| 11/22 第5回WS | ・ツクミツクリタイ設立総会を開催 ・ツクミツクリタイの活動を具体的に考え、今年度中に取り組むべきことと動き出すための意見出し | ・SNSやチラシのデザインについての勉強会をやりたい等、得意分野を活かした企画や収益を見込んだ活動案が提案 |

平成28年度
格を取らず任意団体とし、団体設立に向け会則などを準備する方針とした。

(3) コアメンバー主催の納涼イベント

平成28年8月27日につくみん公園にて、コアメンバー主催の納涼イベントが開催された(写真-16)。納涼イベントには、大分県、市役所、大学、コアメンバー、地域住民など計81名が参加した。このイベントによってコンテナ293号の新たな活用方法が広く周知された。さらに飲み物の販売等から収益を得た経験は、まちづくり組織が社会実験終了後に収益を得ながら自走していくための先駆的な取り組みになったといえる。しかし、事前に参加人数を把握するのが困難であったことやイベントを周知させる方法等については今後改善していく必要があるといえる。

(4) まちづくり学習会

平成28年9月23日にコアメンバーが中心となり、本事業の概要やこれからの構想等について、市長をはじめとする市職員や商工会議所職員の理解を目的としたまちづくり学習会を開催した。またコアメンバーの代表より、コンテナ293号の運営や津久見市のまちづくり活動を行う任意団体「まちづくりツクミツクリタイ(以下:ツク

ミツクリタイ)」の発足が提案された(写真-17)。

(5) 平成28年度つくみん公園ヒアリング実態調査

社会実験開始(コンテナ設置)から1年が経過したことを受け、平成28年10月6日(木)に大分大学が、平成28年10月7日(金)～10月10日(月)に福岡大学が、つくみん公園の来場者の利用実態ならびに意識等を把握することを目的にヒアリング実態調査を実施した。調査時間は10時～18時とし、質問項目として、コンテナ設置前後の賑わいの変化やコンテナの満足度、津久見市の情報発信の評価など20項目を設定した。その結果、平日で46部、休日で175部、計221部の回答を得た。休日は市外からの利用者が多く子ども連れの家族で賑わっていた。ヒアリング調査をする中で目立った意見として、「寒くなるので温かいコーヒーを売っていたら利用する」という意見や、「あまり子どもから目を離せないの、子どもが遊んでいる近くにあるコンテナで軽食が売ってると嬉しい」という意見も挙げた。またコンテナの存在は知っているものの、利用したことが無いという方からは「狭そうで何をやっているのか分からない」「表に看板や広告が無いので入りづらい」という意見が挙げられ、来場者が利用しやすい様な配慮の必要性や今後のコンテナ運営における課題等が把握された。

(6) 組織運営に向けた検討

平成28年10月18日にツクミツクリタイの組織立ち上げに向けた取り組みの検討を目的とした第4回WSが開催された。まずこれまでの活動内容の振り返りを行った後、コンテナの運営予算やツクミツクリタイの設立について説明が行われた。続いて「マネジメント部会」「プレイヤー部会」「サポーター部会」の3つに分かれて、各々の立場でできることを検討するグループ作業に取りかかった。マネジメント部会では、「プレイヤーとサポーターのアイデアを結びつけるハード整備」「将来的に指定管理を取りたい」等、コンテナの施設整備や管理についての意見が挙げられた。プレイヤー部会では、「つくみん公園で小物作りのWSがしたい」「まちなか全体で楽器を使ったストリートライブを行ってみたいかどうか」等、具体的な活動案が多く挙げられた。サポーター部会では、「コンテナを使った活動をした人にはサポーターになってもらう」「楽しく利用しているところを見せる」等の意見が挙げられた(図-10)。

(7) コンテナ 293 号ロゴマーク除幕式

平成28年10月22日にコンテナ293号のロゴマークの除幕式が行われた(写真-18)。昨年の津久見ふるさと振興祭にてコンテナ293号をオープンさせ、コンテナ設置から約1年経つことから除幕式も津久見ふるさと振興祭に合わせて開催された。除幕式には津久見市長や津久見商工会議所会頭、大分大学(姫野氏)、福岡大学(石橋氏)に加え、コアメンバー3名が参加した。また福岡大学が中心となってロゴマークのデザインを進めてきたことから、福岡大学よりロゴマークの概要についての説明が行われた。コンテナ設置から1年という節目の時期に、多くの人が集まるイベントにてコンテナの新たな活動を周知できた良い機会となった。

(8) ツクミツクリタイ設立総会に向けた協議

平成28年11月8日にコアメンバーを中心に大分県、津久見市、福岡大学でツクミツクリタイ設立総会に向けた協議を行った。最初にツクミツクリタイの発起人より、設立の経緯について説明がなされ、会則や役員案、事業計画の共有が行われた。参加者からは、「事務局や会計をどうするか」「ツクミツクリタイ発足後、より多くの人に関わってほしい」等の意見が挙げられ、ツクミツクリタイ設立に向け概ね了承を得ることができた。また第5回WSのグループワークの内容についても議論し、ツクミツクリタイ設立総会ならびに従来のWSメンバーに加えて新たな参加者を交えたグループワークを行うこととし、設立総会をもってツクミツクリタイを始動させることに決定した。

(9) 平成28年度における社会実験の取り組みの検討

平成28年11月22日に開催された第5回WSでは、コアメンバーに加え、新たに参加した地域住民の計45名で議論を行った。まず新たな参加者に向け、本事業の説明及びこれまでのWSの振り返りを行った。その後ツクミツクリタイ設立総会を開催し、ツクミツクリタイ発足に関わる趣旨や会則等について説明が行われ、参加者より承認が得られた。またグループワークでは、ツクミツクリタイの活動を具体的に考え、今年度中に取り組みすべきことと、動き出すための意見出しを行った。参加者からは「SNSやチラシのデザインについての勉強会をやりたい」等、得意分野を共有したいという意見やツクミツクリタイの継続的な活動を行っていくために収益を見込んだ活動案等が挙げられた。



写真-16 納涼イベントの様子



写真-17 まちづくり学習会の様子



写真-18 コンテナ 293 号ロゴマーク

表-5 各項目における行政とまちづくり組織の意見（積極的・肯定的な意見には◎・○を慎重な意見には△を付した）

| 質問項目 | 行政 | まちづくり組織 |
|--|---|--|
| 本事業が久見市へ与えた影響について | ◎市民のまちづくりへの参加/○若い人がまちづくりに関心を持ち始めている/○コンテナができたこと/○コンテナを使ったイベント/△事業へ携わっていない市民へのアピール/△際立って何か感じることはない | ◎コンテナができたこと/○コンテナみたいに見えるものが出た/○人の集まり、賑わい/△賑わいを生み出すまでには至っていない/○ツクミツクリタイがプラットフォームに/△組織としてはまだまだこれから |
| まちづくり学習会実施前後の変化について | ◎事業内容や理解の深化/○行政と民間が一堂に会した「場」への評価/△庁内の変化はあまり感じない/△情報発信の不足 | ○市長や要職など様々な職員が集まった/△あまり上手いかなかった/△変化は感じない/△事業への参加や目に見える行動をするまでは難しい |
| 社会実験終了後における事業もしくは行政の役割に関する考え方について | ◎所属の課としての関わり(コンテナ293号での事業に関する活動などを許可する)/○自分ができることからやる/○コンテナの所有者をどうするか/△まちづくりのプレイヤーとしてまちづくり組織を発展させていきたい | ○十分協力的で理解してもらっている/○共に事業を進めたい ○市職員も一市民として参加してもらいたい |
| 社会実験終了後もコンテナ293号を継続的に活用していくにあたり考えられる課題について | ◎自走を支える収入/○コンテナの所有者をどうするか/○観光案内などサービスの追加/○活性化を目的とした人と個人のお金稼ぎを目的とした人との線引き/○社会実験期間中の準備・協議の必要性(イベントで使うための基準など利用条件を整理)/○公園内での活動への懸念 | ○コンテナが誰の持ち物なのか整理する必要がある/○毎日コンテナを開けるための管理人/○人件費などの経費がかかる/○収入/○ツクミツクリタイが主導的に管理に携わるための準備 |
| 社会実験終了後のコンテナ293号の管理方法について | ◎指定管理や業務委託のような方法もある/○コンテナの無償譲渡/○コンテナの所有者をどうするか/△コンテナでの活動で本当に賑わいが生まれるのか/△公園でないといけない理由 | ◎目的に沿って管理出来る人が大事/○イベントなどの仕掛け、コンテンツの管理運営/○業務委託 |
| その他、本事業に対する懸念事項について | ○定住促進の目的に沿ったものを期待/○社会実験終了後の方が決め事が増える/○社会実験終了後を見据えた29年度の協議の必要性/○ソフト面での変化/○定期的なイベントの開催/○やる気や機運を保ち続ける/○ハードの維持管理のお金/△社会実験の結果が不透明/△情報発信の不足 | ○行政との感覚のずれ/○組織内でのイメージや方向性の違い ○社会実験終了後の構想やビジョンの共有/○行政との意思疎通 ○SNSの担当を一人に任せている |

る」「コンテナみたいに目に見えるものが出来た」等の回答が得られた。

b)②まちづくり学習会実施前後の変化について

行政からは「まちづくり学習会の前後で庁内の大きな変化は感じない」との意見が一部挙げられたものの、多くの職員からは「実際に関わっている人の声を聴けた有意義な時間だった」といった意見が挙げられている。また本事業のWSに参加している市職員は「市長や管理職の職員が参加出来たことはよかった」とまちづくり学習会を評価しており、WSに参加していない市職員からは「まちづくり学習会等に参加して、概ねの事はわかったが、誰がどのように進めてきたかまでは知らない。庁内はこのような人がほとんどではないか」との意見も挙げられた。まちづくり組織からは「行政の変化は特に感じられない」といったように、4名中3名は、行政に対して、特段まちづくり学習会の効果を感じていないという事が把握された。一方で「行政の人と話す時に『頑張ってる』『何かあったら、声をかけて』というような反応も得られた」等、少しずつではあるが変化を感じたという意見も挙げられた。

c)③社会実験終了後における事業もしくは行政の役割に関する考え方について

行政からは、「WSメンバーと話してまちづくり組織をバックアップしていきたい」といった回答が得られた。さらに「コンテナの所有者と施設の管理者が誰になるか、施設の目的等が明確にならないと対応の仕方が変わってくるのではないかと。仮に行政の持ち物となった場合、どのように管理するか、どういう形で利用許可を出せばいいか等を探っていくかといけない。まちづくり団体の

持ち物となった場合は、また違った管理者としての関わり方が出て来るのではないかと」という回答も得られた。まちづくり組織では「十分協力的で理解してもらっている」といった意見や「行政がどのような形で関わってくれるのか分からない」との懸念も挙げられている。また両者の意見の違いとして「まちづくりのプレイヤーとしてまちづくり組織を発展させたい」という行政の意見に対し、まちづくり組織からは「市職員も一市民として参加してもらいたい」との意見が挙げられた。

d)④社会実験終了後もコンテナ 293 号を継続的に活用していくにあたり考えられる課題について

行政からは「県の持ち物である公園に設置しているので、コンテナでの活動に制限がかかるかもしれない」「イベントで使うための基準など利用条件を整理」といった意見が挙げられた。まちづくり組織からは「人件費などの経費がかかる」「コンテナを毎日開けられる状態に加え、コンテナを使って色々な仕掛けをしていける運営を目指す」「管理する人に負担がかかるので、そこを補えるシステムをつくる」といった意見が挙げられている。また両者共通の懸念として「コンテナが誰の持ち物なのか整理する必要がある」との回答も得られている。

e)⑤社会実験終了後のコンテナ 293 号の管理方法について

行政からは「指定管理や業務委託のような方法もある」「施設の管理より運営をどうするかを主に考えるべき。まちづくり組織が自活して運営できるようになれば譲渡するという話にもなる」といった意見が挙げられた。一方で「賑わい創出という事を考えたときに公園内での活動を続けることで本当に賑わいが生まれるのか」とい

うような懸念も挙げられた。まちづくり組織からは「目的に沿って管理出来る人が大事」「ここは自分の店だという想いを持った人がコンテナに居てくれるとよい」「日々の管理とアイデアを持って仕掛けてくれる人がいればよい」といった意見が挙げられた。

f)⑥その他、本事業に対する懸念事項について

行政からは「平成 29 年度から動いていかないといけない」「社会実験でどのような結果が得られたというのが表に出ていない」といった意見や「そもそもまちなかが賑わう必要があるのか、どういった意味で賑わえば良いのか考えて欲しい」といった要望が挙げられた。まちづくり組織からは「まちづくり組織と行政とで感覚が違う」「メンバー内でイメージや方向性が違っている。行政を含めて意志を共有していくことが大きな課題」といった意見が挙げられた。

6. 本事業における社会実験に対する総合評価

前述までを踏まえて、本研究を通して抽出された社会実験による成果と今後に向けた意識的課題を以下に考察する。

(1) 社会実験による現時点での成果

まず、前述したヒアリング調査からは、コンテナ293号という「場」が創出されたことで賑わいにつながる市民の活動が目に見えるようになったこと、まちづくり活動への若者の参画が盛んになったこと等の成果につながったことが確認された。これまで津久見市で継続されてきたまちづくり活動によって醸成された機運を、社会実験が後押しする形でまちづくりの活性化拠点として結実したものと捉えられる。

(2) まちづくり関係者間での役割に対する見解の相違

一方で、まちづくりにおける役割に対する見解は、行政とまちづくり組織とで異なっていることも把握された。行政は本事業を立ち上げた立場ではあるが、当事者として主導するのではなく、まちづくり組織に主体となって活動するよう期待する姿勢が窺えた。これに対して、まちづくり組織は行政といかに協働しながら活動を進めるか模索している。以上の見解の相違は両者への独立したヒアリングによって明らかになっており、この相違をど

のように共有、補完するかが課題である。

(3) 社会実験終了後の所有に関する検討の必要性

さらにコンテナ293号という場の創出がもたらした新たな課題も浮き彫りになった。それは、行政とまちづくり組織の社会実験終了後を見据えた共通見解として、継続的な運営・管理方法や組織のあり方についてコンテナ293号の所有に関する懸念が挙げられたことである。この所有権に加えて、今後のまちづくりにおける主導権を行政とまちづくり組織のどちらがとるか、あるいはどのように分担するか、その後のコンテナ293号の運営・管理方法も含めて、社会実験3年目に早急に検討すべき論点が明確化されたと考えられる。

7. 結語：今後のまちづくり活動の展開に向けて

本研究より得られた関係者間の場の創出に対する共通の評価、役割に対する見解の相違等は、まちづくり活動の発展過程における必要な意識醸成の局面と捉えられ、社会実験終了後を見据えた今後の建設的な活動展開に期待したいところである。

謝辞：本研究を遂行するにあたり、ヒアリング調査の過程で津久見市・まちづくり組織等の多くの関係者の方々にご協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。また、本研究は福岡大学工学部社会デザイン工学科平成28年度卒業の山下晃輝氏と共同でなされたものに追加・修正したものです。ここに山下氏の多大なる貢献があったことを記し謝意を表します。

参考文献

- 1) 佐賀市街なか再生社会実験実施業務報告書：第1章-1 社会実験の実施報告，pp2-3，2012
- 2) 津久見市：「市中心部商店街の変遷」資料
- 3) 津久見市 HP：まちづくり・コミュニティ「みなとオアシス津久見」
- 4) 津久見市 HP：まちづくり・コミュニティ「都市計画マスタープラン」
- 5) 津久見市：都市計画マスタープラン 全体構想「都市の特性・問題点と課題」資料，2010

(2017. 4. 28 受付)